

¡Hola, amigos!

第077号

(RとNの Cádiz からの手紙)

皆さんこんにちは。これはHPというより、私達の近況をお知らせする長い手紙のようなものです。そのつもりでお読みください。

更新は毎週、日本時間の金曜朝03:00時から07:00時の間に実施します。

臨時休刊の場合は、なるべくその前の週にお知らせします。

なお、バック・ナンバーは最近三号分のみとし、それ以前のは順次削除します。

では、今週号へどうぞ。 2005年09月09日 カァディスにてR y N

☆今週号のトップヘジャンプ

現在有効なバック・ナンバーは076号(09月02日)、075号(08月26日)

074号(08月19日)の三週分です。各週のトップにあるボタンからどうぞ。



今週号 No.077 (2005年・第37週) 09月09日更新

「バーボン・ストリート」の巻

アメリカ南部諸州のハリケーン被害はものすごかったですね。特にニュー・オーリンズ近辺が一番ひどかったみたいです。あの辺、テキサス、ルイジアナ、ミシシッピ、アラバマ、フロリダなどメキシコ湾沿岸は現役の間は縁の深いところでした。

ミシシッピ河の上流地帯が豪雪だった翌年、その雪解けの増水でニュー・オーリンズの町が水浸しになったなんて事もありました。けれどもあんな猛烈なハリケーンが直撃なんて……。地球はやっぱり病んでいるとしか思えません。

ニュー・オーリンズは忘れがたい港のひとつです。卒業して国家試験を終え、プロの船乗りとして乗船した最初の船、古い船乗りはそれをオヤブネと呼んでいましたが、その船での初航海で、初めて上陸した合衆国の港がニュー・オーリンズでした。上陸とはオーバーですが船乗り語で外出です。ゴーショウとも言いました go ashore のナマリです。ゴーショウ着といえぱ一張羅、ゴーショウ靴はぴかぴかの外出用。

ニュー・オーリンズはNOLA。New Orleans, Louisiana の略ですね。電報用語です。このほか、業界ではノッチNOCHとかソッチSOCHとかわけのワカラン符丁を色々使います。NOCHは North of Cape Hatteras ケープ・ハッターラスの北、すなわち米国東部諸州の港、SOCHは South of ……で南部諸州の港という意味です。NOLAはもちろんSOCH。

オヤブネ、有馬山丸は、一万トン・クラスの貨物船としては、今も横浜に係留されている日本郵船の氷川丸などと共に、数少ない戦前からの生き残りで、古いけれどナカナカ味のあるスマートないい船でした。確か昭和13年デキだったと思います。

戦時中は病院船だったので、他の多くの商船が撃沈されたなかで何とか生き残れたん

です。船倉上部には、そこが病室だった頃の丸窓を塞いだ跡が沢山ありました。Rの部屋の分厚い真鍮のネーム・プレートには「次席三等運転士」と彫ってありました。この船ができた頃は航海士といわず運転士と言ってたんですね。ネーム・プレートだけでなく、船内の調度には真鍮をふんだんに使ってあって、掃除担当クルーは真鍮磨きにかなりの時間を費やしていました。

当時はタンツーと言って朝食前に掃除など軽作業を片付ける時間帯を設けてありました。ターン・トゥ・ワーク、turn to work 仕事始め、のなまった言い方です。真鍮磨きはおそらくこの時間帯にされていました。ピカピカに光る真鍮のドア・ハンドルや手すりの金物は気持ちのいいものでした。磨くヒトは大変ですけどね。

駆け出し航海士には労働時間割りなど無いが同然、休メと言われない限り仕事です。オイ、フォース・オフィサー(次席三等航海士のこと)お前は毎月80時間、などとチーフ・オフィサー(一等航海士=チーフサー)に一方向的に宣言されるのが普通でした。

実際は毎月百数十時間の時間外は当たり前になっていたのにネ。古き良き時代。その船は中南米ガルフ定航と呼ばれる最も忙しい定期航路の一つに就航していました。かいつまんで言うとロスを振り出しにメキシコ以下の中米西岸諸港を転々、パナマ運河を通過したら、南米大陸北岸やカリブ海の島々、そしてカリブ海の締めくくりはキューバのハバナ。当時はまだ米国のキューバ海上封鎖作戦は取られておらず、自由圏諸国の船も入港できたのです。けれど、それも最初の航海だけで二航海目には既に海上封鎖が発動されていて抜港になった記憶があります。

ハバナ以降はマイアミなどフロリダ東岸から始まってメキシコ湾 Gulf of Mexico(通称ガルフ)の港を反時計回りに巡回してゆくのです。日本で積んだ貨物の揚げ地だけでも20数港、途中の港でも揚げ積み同時進行というものすごさ。今から考えてもよく体がモッタという忙しさでした。揚げ荷が少ない港では停泊時間もほんの数時間、出港して数時間走るともう次の港なんて所もありました。とにかく忙しい。

そんななかで、ニュー・オーリンズはガルフでは最大の貨物の集散地でしたから、揚げ積みとも貨物量は多く、当然、停泊も比較的長く、そうなれば忙中閑アリありは必然。オイ、フォース・オフィサー、陸(オカ)へ行ってもいいゾ。とチーフサーに声をかけられ、但し何時までだゾー、は背中で聞いて喜び勇んでこの古い港町の探検に飛

び出したものです。

ニュー・オーリンズ！ テネシー・ウィリアムズ「欲望という名の電車」の世界。探検する場所には事欠きません。港にまっすぐぶち当たる大通りはキャナル・ストリート、角を曲がるとすぐ魔窟フレンチ・クォーターです。

バーボン・ストリートはその中心ともいえる小さな古い通り。両側の建物のバルコニーには洒落た透かし模様の手すりがついていて、フランスの植民地だった頃の雰囲気の色濃く残していました。そこここから流れてくる重ったるく物憂い調子のジャズ。ジャズ酒場のひとつを覗くと、精々100平米あるかなしかという狭い店内は人で一杯。座れる椅子なんてひとつも空いておらず、殆どみんなグラス片手に立ったまま、ジャズの原点である泥臭く、粘っこく、情感豊かなディキシーランドの演奏に聞き入っています。カウンターでグラスを受け取ると早速仲間入り。

演奏者はいずれもヨボヨボといってもいい位の白髪頭の黒人のジーさまばかり、殆どは椅子に腰掛けて居眠りしてるんじゃないかというスタイルで演奏していますが、時折ここぞというソロの演奏ではしゃっきりと立上がります。

頭の中でディキシーががんがん共鳴するようになったら一息入れに次の店へ。ニュー・オーリンズ名物ナマ牡蠣の店。テーブルにつくなり、何ダース？ と聞かれてビックリ。ここでは殻付き牡蠣はダース単位で注文するんです。へりにグルッと殻付きを12個並べた大皿の中心はクシ切りのレモンが山盛り。これをたっぷり絞りかけるだけ。船の冷凍食品ばかり食べていた舌には至福の一瞬。

周りを見回すと、アメリカ人は更にカラシやらなにやら色々かけてます。もったいない。ホット・ドッグじゃねーんだヨ。ヤッパ生ものの味なんて解っちゃいないんだ。

シンプルにレモン汁だけが一番いいと思うけど、まあ、好きにやって・・・。当時の印象ではこの川筋のどの町へ行っても黒人の住民比率がとても高かった。一時は奴隷売買の中心地だったところだそうですから、当然と言えば当然です。

初めてのとき、とても驚いたのは、飲食店などにカラード・ピープル・オンリーという掲示があったこと。バスに乗っても半分からは白人用シート、後ろがカラード・ピープルに分かれていました。あるときバスに乗ってカラードの席に座ろうとしたらホワイトのオッサンにお前はこっちへ座ればいいんだと呼ばれたこともありました。

店の表示もホワイト・オンリーではなく、カラード・オンリーと言うところがちょっと引っかけられます。要するにこれはプアー・ホワイトに対する警告ではないか？

お前は貧しくともホワイトなんだからカラードの店なんかに入って同化するんじゃないぞと言っているのかな？ そんな印象をもったのを憶えています。もし、カラード・オンリーの表示のないところへカラードが入ったらどうなるのか？カラードはカラード・オンリー以外のところへは入るなよという言外の警告でもあったのか？

その頃はまだケネディ大統領が就任したばかりの頃で黒人の社会進出は極めて制限されていたのでしょ。こういう状態もその後ケネディの政策ゆえか、じきに見かけられなくなりました。公民権法公布はこれより更に2年後のことでした。

ま、とにかくニュー・オーリンズの町は混沌そのもの。まさに Deep South です。以来40年間、足を洗って完全に陸のヒトになるまで、ミシシッピの河筋のあちこちへは足しげく通うことになりました。一体この河には何回入ったことか？ 少なくとも20数回、いや多分それ以上だったでしょう。

初乗船から10数年たって、Rも既に年季の入ったチョフサーになっていたある航海で、ニュー・オーリンズに停泊していたときのこと。ある日コースト・ガードの臨検を受けました。何にもセン長殿は不在。停泊セン長たる一等航海士が何でも一手引き受けの場面です。コースト・ガードの臨検は、今では数名のチームで押し寄せてそれこそ風潰しに容赦なく船内全てをくまなく検査しますが、30年以上も前のこと、それほど厳しさはなく、書類審査と検問にへドモドしないで答えればOK、というのどかな時代でした。

臨検者は士官と若い下士官各一名。検問はもっぱら下士官が行い士官殿は横でコーヒー飲みながらタバコふかして聞き役。弱ったのはこの下士官殿の英語が超難しい。

コレ果たして英語なんだろうか？ と疑いたくなるような口調です。

それで無くともヒアリングにはさっぱり自信のない身なのに、矢継ぎ早にあれこれ質問されて、一問一問、それはこういう質問ですか？とこっちから確認の質問をしなかりゃならんシマツ。何しろ公式の質問ですから迂闊な答えはできません。

そのうち気が付いたのは、この下士官殿デスクのかげに検問一覧表みたいなものを隠し持っていること。一問回答し終わるごとに彼が下を向くので気が付いたのです。

そこで、「まことに申し訳ないが質問表があるならそれを私に見せて欲しい。そしてら回答を紙に書いて渡します。悪いけど私はヒアリングが弱くてアナタの質問の意味がとても分かりにくいんだけど、読み書きはできると思うから」。すると、それまで黙って聞き役に徹していた士官殿は呵呵大笑。「チーフ・メイトそれはアンタが悪い

んじゃないヨ、実は俺もコイツの言ってることは殆ど分からないんだ」だと。

当の下士官殿もニヤニヤ苦笑いしてます。デ、コレにて臨検終了。南部米語はホントに英語だかなんだか分かりません。二人とも純ホワイトでしたけどね。

昔、ルイジアナ・ママという歌がありましたね。この最後の文句がどうしても聞き取れない、ナニってんだかという具合。何回聞いても「ロニューオーレン」としか聞こえません。ロニューオーレンってナンだ？ 印刷された歌詞をみたら、なーんだ、from New Orleans でした。ふロむ・ニュー・オーレンズ。まったく、どうしようもない耳。あの時の下士官殿ならどう言うか聞いてみたいもの。彼は無事だったかナー。***

「フィデウア」の巻

パエリヤまたはパエリャまたはパエヤまたはパエジャ、本当の発音はどれが正しいのか分かりませんが、私たちの耳では後の三つのいずれかに聞こえます。

日本では最初のパエリヤが普通みたいですね。まあ呼び名はどうでも大差なし、要するにスペイン風炊き込みメシまたはオジャです。コレについては改めて何をか言わんやで、日本でも随分前から普及していますね。私たちが結婚したての頃食べた覚えがありますが、なんじゃこりゃ、くらいの印象で日本ではそれっきりになりました。店のは色々トッピングしてあってきれいにキレイに飾ってありますが、元はと言えば山の番人や羊飼いやなどがオベント替わりに作った野外料理なんだと聞いています。

だから、もともとは魚介は使わず鳥やウサギ肉、豆などを使っていたらしい。

でも、料理も進化して悪いわけはありません。旨くなってゆくのは大いに結構。

今日のお話の料理もパエリャの進化したもののひとつだろうと思います。



こんなもの日本のスーパーに売ってるのでしょうか？ 世界中のものがナンでもある日本のことだから、勿論あるんでしょうね。私たちは前にも言ったように無類のメン好きですが、日本にいたときはコレには気付きませんでした。

コレに限らず、大体パスタの棚をそれほど熱心に見ていなかったのです。時々極細のスパゲッティを買うくらい。日本でなら、蕎麦だろうが、饅頭だろうが、そうめん、冷麦、ラーメン、ビーフン、フォーと何でもありですから、パスタまで手が伸びなかったんです。たまにスパゲッティやラザーニャを作ることはあってもそれまで。

スペインへ来て、すぐにスーパーのパスタ・コーナーにコレを見つけましたが、ああスープのウキミね、ぐらいにしか考えていませんでした。事実、ソトメシで食べるスープには豆なんかと一緒に入っていることが多いんです。

ところが、ある料理の本、日本人の書いた日本語の本ですが、それにこのパスタを使ったパエリア風料理のことが出ていました。フィデウア fideuá という名前も初めて知りました。コリヤ是非やってみなくちゃなるまい。そして初めてそのフィデウア材料、このフィデオ fideo を買ったのです。もうかれこれ三年前のことです。



これがそのフィデウア、と言えるかどうか？ 実は私たち、フィデウアなるモノを店で、例えばアロセリヤ(パエリヤ専門店)などで食べたことがないんです。

要するにパエリヤの米の替りにフィデオを使えばいいんだろ、という発想で、勝手にこうすりゃ旨そう、こうしたほうがもっと旨そう、と色々にやってみたのです。

この写真もそのバリエーションのひとつに過ぎません。基本的超簡単レシピは・・・。テフロンフライパンにオリーブ油少々、タマネギを小さくきったものを良く炒めます。水と白ワインで溶いたスープ(何のスープでもお好み次第)をフィデオの約2倍入れます。そして最後はフィデオ。後はぐつぐつ煮るだけ。フィデオの量とスープの量はフィデオの太さでも違いますからそこは試行錯誤、コレダ、というポイントは自分流で探してください。ウチではもっぱらこのN°0というフィデオ、ナンバー・ゼロですから多分一番細いのだと思いますが、コレを二人で1カップ半です。

上の写真のものはオリーブ油、ニンニク、タマネギ、種抜きトマト、ナス、肉厚赤ピーマン、鶏がらスープにブルー・チーズ。そしてとどめはコリアンダー。唯一の「ネバならぬ」は上手にオコゲを作る事。この料理、オコゲが命。赤に合います。***

「惑星接近」の巻

最近、星をじっくり眺めたことはありますか？ 首都圏に住んでいると夜空を見上げてもきれいな星空を見ることはナカナカ難しいですね。

私たちも藤沢に住んでいたときは、星に関して何かあると近所の墓苑の裏まで行って見たものです。さすがに夜中の墓地裏はヒト気が無く真っ暗で、星を見る態勢はできても正直余りイイ気分ではありません。それに足元は暗いのに空には地上からの光が反射して「降るような星」という形容には程遠い状態でした。

やはり、海上、しかも沿岸から遠く離れた洋上で見る星が一番です。地上からの明かりはないし、さえぎるものは雲だけです。40年の海上生活で見飽きたはずの星ですが、朝焼けや夕焼けを見飽きないのと同様こういうものは何度見ても見飽きると言うことはありません。星なんかどうでもいいと言う人には・・・、まあ、どうでもいいことか。

船乗り暮らし前半の20年、星はただ眺めるものではなくメシの種でした。当時は星や太陽の高度を六分儀で計って船の位置を割り出していたのです。コレは航海士の重要な仕事の一つで、地上の目標が何も無い大洋では、マゼランやコロンブスがやっていたのと基本的には同じ航海術いわゆる天文航法に頼るしかなかったのです。球面三角法です。サイン・コサイン・タンジェントです。

人工衛星による航法が実用化されてからも、初期の頃は受信機も高価、信頼性もイマイチで、まだ天文航法を捨てるところまでは行きませんでした。しかし、皆さんも良くご存知のカーナビ、即ちGPSが普及すると、もはやキャプテン・クックの航海術の時代ではなくなり、星はただ眺めるだけものになってしまいました。

時期を前後して、貨物も一般雑貨は殆どコンテナに詰めて運ぶようになり、船そのものの形態も大きく変わりました。特別な技能を要求されることが少なくなると、乗組員も安けりゃイイが最優先となり、外航船の分野では日本人船員の出る幕はなくなってしまうのです。まあ、無人惑星探査機が打ち上げられるような時代ですから、

船の世界が変わるのもシカタないか。



その惑星、水・金・地・火・木・土・天・海・冥と覚えたのは小学校何年の頃だったか。このうち金星と木星が、8月に入って太陽が沈むとすぐ、並んでベランダ正面の南西の空に輝くようになりました。最接近の一週間前、こんな風です。右下大きい方

が金星、左上が木星です。実はこの時、まだ太陽は沈みきっていません。

この二つの惑星は見た目が大きすぎて、星の高度を六分儀で測定する作業「天測」には向きません。高度を計るには星の中心「点」と水平「線」を六分儀の視野の中で合わせるんですが、こんな風に星が小さな「円」になってしまうとその中心の「点」が

どこなのか、周りの状況、または見る人の眼によって微妙に狂います。

それがそのまま測定した船の位置の誤差につながります。だから、星は余り明るくない方が、言い換えれば点に近い方がいいんですが、余り小さいと、星が見えてくる頃

には水平線が見えなくなってしまう不都合があります。

水平線がはっきり見えるうちに、明るすぎない星を見つけるのが正確な天測をするコツです。まだ十分明るいうちに明るい星から測定しておいて、段々水平線が暗くなるとともにタイミングよく、ヨリ小さく暗い星の測定に移って行くと言う具合です。



再接近の二週間前には木星はずっと左上の白い星マークのあたりにあったんですが、段々金星に近づく様子でした。それまでの木星の軌跡の先を予想すると、カナリ金星に近くなりそうです。「近く」と言う表現は正しくはありませんね、地球と金星を結ぶ線の延長線近くを木星の軌道が通ると言えればいいでしょうか。

この写真は、水平線がこの暗さになる前には天測を終えていたい、という暗さです。このタイミングをはずさないためにはまだ太陽が沈みきらないうちからキョロキョロしていなくてはなりません。木星や金星は、それ自体は天測に使わないとしても、ほかのもっと暗い星を見つける目印にはもってこいです。特に金星は目がよければ昼でも見えますからね。今までの話は夕方の天測ですが、明け方は勿論この逆、暗い星から測定を始めて段々光の強い星に移ってゆき測定し終わったら太陽が顔を出すというのがベストです。

スペイン語で木星は Júpiter、金星は Venus、綴りは英語と同じですが発音はフピテルとベヌスです。そして日本語の明けの明星、宵の明星に相当する言い方もあって、それぞれ Lucífero ルシフェロ、Véspero ベスペロと言うようです。



これは8月31日。まだ木星が左にあります。この二つが「点」ではなく「円」だということがよく分かりますね。勿論これはズーム・アップした写真ですが、この二つが天測に適さないとはこういうことです。日ごろ、肉眼で見ていると明るいなあとは思っても、こんな風に丸い面積を持ったものとしては認識していないのが普通ではないでしょうか。望遠鏡か双眼鏡をお持ちなら、改めて月や星を覗いてみてください。肉眼で見るだけでは見過ごしていた何か新しい発見があるかも知れません。勿論それは天文学的には周知の事実であるでしょうが、それを自分の眼で見ることに意味があると思うのです。望遠鏡の中の月や星にはまた違った美しさがあると保証します。

百科事典によると、木星には16個もの衛星があるのだそうです。そのうち4個は、かのガリレイが発見したのだそうですが、今手元にある12倍防振双眼鏡では3個しか確認できません。ベランダからでは浜の夜間照明が邪魔をして小さい星は見えないのです。照明が無くなるのはいつか？ 多分学校が始まる15日頃までと思いますが

そのときまだ日没後の水平線上に木星が残っているかどうか？

4個目の衛星を是非このベランダから見てみたい、と思っています。



そして9月1日、木曜日。木星が金星の右上になりました。言うまでもありませんがこの写真は撮影後に回転や拡大などの手を加えたものではありません。カメラを三脚に「水平」に据えてズーム・アップして撮っただけです。

前の写真より一段と丸い大きい面積を持った見掛けが強調されてますね。上の2枚の写真、ズームは全く同じ条件ですが、あとの写真の方が暗くなってからなので、より大きく明るく見えるんです。同じ明るさのとき撮ろうと構えていたんですが、そのときは雲に隠れて取れませんでした。

大体、洋上でもソウですが、日没や日出前後は今まで晴れていた空が突然一時的に曇ることはよく経験することです。Rは一等航海士だった12年間、毎朝・毎晩、スター・サイト(星の高度測定)を繰り返したんですが、この突然の雲にはよく泣かされました。日没前後には気温が急変して雲が発生しやすいんです。さっきまで見えていた星が、サテと六分儀で覗くともう見えない。

このズームした写真ではどの程度近かったか分かりにくいですね。それではまた2枚目の写真と同じくズームなしで、もう少し広い範囲を見ましょう。



ネッ、近いでしょう？ もうちょっとで地球と金星・木星が一線に並ぶところでしたねー。よく憶えてませんが惑星が一線に並んだとき何か良くない起こるんだとか言う話もあったような。あれはなんだったかな？

木星も金星も22時頃にはもう水平線下に沈んでしまいます。その頃にはこれよりずっと左手に蠍座の α 、赤いアンタレス Antares が見えてきます。

早朝4時・5時ごろ目が覚めると大抵ベランダへ出てみます。何しろ長時間連続睡眠ができないタチです。相棒は8時間寝ないと調子が出ないというヒトですからソーツと忍び足。ヒンヤリとしたベランダで見る夜明け前の静かな澄んだ空。

西の空に、琴座の α ・織女ベガ Vega、白鳥座の α ・デネブ Deneb、鷲座の α ・牽牛アルタイル Altair、の三つが作る大きな直角三角形がみえます。アンタレスも含めて、これらはみな20数年前まで毎日六分儀を通してよく見た星です。いずれも水平線が明るい時間帯でもよく見える強く光る星で、夕方には最初に、明け方には最後に使うのに重宝でした。浜の照明にもまけずくっきりと夜空に輝いています。

花の色はうつりにけりな・・・、ですが星の色は何年たっても変ることなし。***
